

篠原 徹

自然を歩く ⑤

【沖繩の海と廃村】

沖繩をはじめて訪れたのは1975年であったと思う。明和8年（1771）に石垣島近海の大津波による大地震があった。この時の大津波によってほとんど滅びてしまった西表島西南部の鹿川（カヌカ）という村があった。その廃村を調査していた友人の人類学者の仕事を手伝いに行った時が最初の沖繩である。西表島の北西海岸の集落・租納（ソナイ）から海岸沿いに歩きマングローブ林で野営し、次の日山中を突っ切って鹿川にでた。ときに現れる棘だらけのアダン林の壮絶な藪こぎと当地でアハムシといていたダニとヤマビルとの攻撃に、本土の西日本の常緑広葉樹林の二次林と亜熱帯林のちがいをまざまざと知った。津波で滅んだ鹿川村は海岸から40メートルほどの高さであり、昏い樹林から沖繩の海がみえた。在りし日の鹿川村は亜熱帯林に埋もれた、暑くても涼やかな、どこまでも静謐な村であったろうと想像した。「しんしんと肺碧きまで海の旅」（篠原鳳作）はその後知った句であるが、あの海をみると無季句であるうがなかるうがこう詠わざるをえなかつたと思うほどの碧さであった。